

充実の一年 ～教育研修センター・教育支援センター事業へのお礼～



3月。一年間のしめくくり。昨日、13日は中学校、義務教育学校の卒業式。市内10校の中学校、義務教育学校の生徒が立派に巣立っていきました。

さて、教育研修センター、教育支援センターの令和6年度の事業推進につきましては、各学校、先生方には大変お世話様になりました。大きな成果を残し、年度末を迎えることができたことにあらためて感謝申し上げます。

学校の主役は子どもです。教師はその子どもを授業に多くの時間を費やし育てています。だから、学校で教職員が最も大事にしなければならないのは授業です。

業務の中心に授業を据え、授業の質を高める挑戦をしていくことは、教材研究やリフレクション（振り返り）など当然それなりに時間がかかることですが、授業の質が高まれば高まるほど、授業の中で学力向上はもちろん、いじめや不登校、子どもの荒れなど多くの困難や課題が解決でき、費やす時間も削減されるはず。教職員も業務に対してやりがいと喜びを持ち、次年度も各学校がよい教育活動を推進できるよう、教育研修センター、教育支援センターともに、全力を尽くしてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

(教育研修センター所長 武田 純 教育支援センター所長 芳賀 孝美)

須賀川市第3回授業づくり研修会より

2月21日(金)。稲田学園を会場に、須賀川市第3回授業づくり研修会を開催しました。授業者は、2年担任面川恵子先生。講師は、東京大学名誉教授 秋田喜代美先生。授業は「算数「はこの形をしらべよう」」。さいころの形(立方体)の組み立て方を考えることをとおして、面や辺の位置関係を理解することができるようにすることがねらいの授業です。

実際には、以下の4つの課題をもとに授業がデザインされていきました。

1 共有の課題 色のついた6面(立方体の面を写し、切り抜いたもの)の画用紙をシールでつなぎはこの形にする。 箱をつくるには6面がどのような関係があればよいか、言葉でまとめる。 2 ジャンプ1 さいころになるものはどの型紙か。○をつける ① ② ③ ④ 3 ジャンプ2 あいている面に、目を入れる ① ②	4 ジャンプ3 自分で目を書いてみる
--	---



▲ 授業の様子(左)と秋田先生の講演(右)

子どもが夢中になって学ぶ、見ごたえのある授業でしたので、その後のリフレクションもグループごとに参観した先生方から子どもの学びから学んだことが多く出され、深まりのある交流の場となりました。

リフレクション後、秋田喜代美先生から「稲田学園の授業に学び、これからの授業について考える」という演題で講話がありましたが、その内容を下記に箇条書きにて記します。今後の授業づくりの参考とさせていただきます。

- 昔と比べると今は大きく授業のスタイルが変わってきている。そこに挑戦をし、稲田学園の先生方はもっと学びを豊かにできないか、もっと子どもがワクワク感を感じながら授業ができないかと試行錯誤をしていることが分かりとても価値のあることだと思った。午後の中心授業はペアの関係を育んでおりまだ途上であるが、今後が楽しみである。
- ジャンプの課題は子どもがワクワクするが、今日の授業は課題が共有の課題、ジャンプの課題をあわせて4つあった。課題はスモールステップの発想でつくらないこと。共有の課題「さいころのひみつをさぐる

う」において、さいころの形を組み立てる実体験のシーンとした雰囲気はとてもよい。ジャンプの課題1は子どもの手が動いていなかった。ところがジャンプの課題2においては、一転ワクワクし始めている子どもの様子がうかがえた。最後のジャンプの課題3の問題は自分で選んで自分で考えられる発展的な課題であり子どもはとても生き生きしていた。4つの問題を精選し、スリムにして子どもにたっぷり考えさせることが重要。



- 共有の課題「さいころの形のひみつをさぐろう」は子どもに学びを委ねつつ、「本質的な教科の思考としての見方や考え方、概念を育む」「切実感がある」「リバランスが高い」など、真正性があり共感できるのだが、授業者が答えを言うのではなく、最後まで子どもに挑戦させ、ひみつを見出させたい。
- 「ねえ、教えて」という明らかな援助要請はなかったが、子どもを観察するとチラ見をしたり、お互いに見合いながら「こうだよ」などと言いつつ合っている姿があり、助け合って学ぶ様子がうかがえた。もっと机と机の間の距離を近くしてもよい。
- ジャンプの課題に夢中になって取り組むが、学力がつかないという話をよく聞く。これは、振り返りの時間がなかったり自分で定着のためのノートづくり（学習日記なども含む）をしていないためであるということが分かってきている。ジャンプさせることは大事。その後、ジャンプしたことを隣の人と振り返ってみるなどの時間をとること。
※ ある中学校では、自学ノートを活用している。今日学んだことを家庭で「つきつめる」「ふりかえる（復習）」「乗り越える（苦手の復習）」「備える（予習）」の視点で取り組んでおり成果が上がっている。
- 今日は図形の領域であったが、幼時期を含めて1年から年が進むにあたり、どういう学びをしていくのか系統性をつかんでおくとうい。単元から単元へ、前時から本時へのつながりが見えてくる。
- 「個別最適な学習」を進めるにあたって大切なことは「何をどの順で学ぶか（内容）」「誰と学ぶか（個・ペア・協働）」「いつまでに学ぶか（時間）」「何をを使うか（道具・メディア、教科書、資料、本、ICT）」「考えをどう表現するか」「どこで学ぶか（空間）」を子どもに委ね、選択させることである。

多くのことが学べた一日となりました。ぜひ日々の授業に生かしてほしいと思っています。授業者の面川恵子先生、会場を提供していただき、準備を整えてくださいました稲田学園の職員の皆様に感謝申し上げます。

教師の「初心」・ 学校教育の「初心」 《コラム No.19》



締めくくりの月となりました。あらためて「初心忘るべからず」と思ったりしますが、世阿弥の言う「初心」は「はじめの頃の新鮮でみずみずしい純粋な気持ち…」とは異なるようです。

三箇条の口伝あり、として「是非の初心忘るべからず」「時々の初心忘るべからず」「老後の初心忘るべからず」と、初心者の時のみならず老年になっても常にその時々の「未熟な状態」(=初心)があることを忘れず、常に精進し変わり続けなさい…(初心者の頃の気持ちを持ち続けるというより)その時々にある「未熟さ」から歩み始め、変わり続けなさい、という意味合いの教えだそうです。

もちろん教師になった頃の新鮮な気持ちや覚悟を持ち続けることは大切なことです。しかし10年、20年、30年、円熟期となった50代でも、新たに出発し、変わって行こうとする「初心=未熟さから歩み始めて変わろうとする気持ち」を持つことが大切とも言えるでしょう。

第四次産業革命そしてSociety5.0と言われる今、以前は万年・千年・百年単位だった変革が今は十年単位となり、私たちは40年の教師人生の中で、それを2度も3度も経験しながら教職を続けることになります。常に変わろうとし変わり得るニュートラルな状態にすることが、21世紀を生きる子どもたちに必要な学びを保障する責任を果たすことになるし、またいなければなりません。「学び続ける」教師とは、世阿弥の「初心」に常にいながら自分が変わることを意味します。

学校教育全体も「初心」であり続けるように思えます。幼児教育に続いて順に小中学校へと子ども主体の教育に移行し続けています。昭和30年代初め、学習指導要領が手引きではなく拘束力を持つと同じ時期に、初めての幼稚園教育要領が出されます。保育内容は小学校の教科に準ずる6領域が設定されました。その30年後、平成元年の教育要領全面改訂で、幼児の主体性と育ちの全体性を主眼とする保育内容に180度転換しました(保育指針も同じ流れ)。現場には戸惑い、混乱もありましたが、一時期を経て保育・幼児教育は子ども主体へと見事に転換しました。昭和末平成初、当時の保育・幼児教育関係者、文部省委員会関係者がどれほど熱く日本の教育を子ども主体に下から(保育・幼児教育から)変えていこうと語り合ったか、その姿を私も当時WG委員をしていたのでよく覚えています。

それから30年、小中学校が「主体的・対話的・深い」学びに転換し始めました。日本の学校教育の「初心」がまたここにあることに感銘を覚えるとともに、社会の変革の速さに比べて寂しいほどに長い時を要しています。高校教育も転換の舵を切り始めたように見えますが、難しい状況にありその変革にはまだまだ時を要するようです。わが国の保育・幼児教育・学校教育が「初心」を忘れず歩み、変わり続けることは長い時とともに次の世代に託して行くことになるようです。

さて、須賀川の保育・幼児教育・学校教育がこれからどこに歩むのか、それも次の方々に託したいと思います。須賀川のすべての子どもたちに、質の高い育ちと学びが保障されることを願いながら。